アメリカの大学におけるコメンスメントスピーチ(四)

アン・ラモット、マーク・ルイス、トーマス・フリードマン

小笠原　はるの
遠藤　昌子

本稿においては、現代におけるスピーチ文化の一部である三つのコメンスメントスピーチを見ていく。二〇〇三年に行われたアン・ラモットのスピーチ、二〇〇〇年のマーク・ルイスのスピーチ、そして二〇〇五年のトーマス・フリードマンのスピーチである。それぞれのスピーカーの紹介をしたうえで翻訳を試みる。

一、アン・ラモットについて

三十数年に渡る作家人生の中で、アン・ラモットは「書くことと生きること」の同時性に常に焦点を当て続けてきた。それは同時に、信仰やシングルマザーであることをめぐるアイデンティティや、社会的な枠組みに規定された「人としての生き方」といったものに対して、疑問を投げ続けてきた創作活動とも言える。[*1]

アン・ラモットの作品には、自身の生い立ちから父母の離別、シングルマザーとして

*1 Anne Lamott, *Traveling Mercies: Some Thoughts on Faith.* New York: Pantheon Books, 1999

の育児からアルコール中毒、そして自由奔放な信仰にまでについてが、躊躇することなく描かれている。特筆すべきはそのユーモラスな目線と大胆さである。「みんなの作家」(People's author) と呼ばれるだけあって、飾らない文章は、読者に大きな癒しを与えるだけでなく、こうでなければならないといった社会が求める規範を大きくやぶるものであり、そのストレートな表現が、彼女の名を世に知らしめることになった。[*2] ここでは、ラモットの生い立ちと、書くことと生きることに対する姿勢、そしてそれらをテーマにした作品の一部を紹介していく。

書くことを知る

アン・ラモットは、一九五四年、アメリカのサンフランシスコに生まれた（写真1）。[*3] 子供のころから読書に夢中で、週に一回両親に連れられて図書館へ行き、一週間分の本を借りてきては夕食後にページをめくるといった家庭に育つ。父親は作家で、母親はボランティアや社交活動にあけくれるという、一見して自由で、知的好奇心が大いに養われるような環境だった。しかし、その実、父親と母親の関係は冷めていて、ラモットが大人になる前に両親は離婚する。ラモットの友人の親たちは教員や医者や消防士や弁護士で、テニスやゴルフを愛好しているというのに、自分の父親の周りにいるのはアーティストばかりで、家に遊びにくるや酔いつぶれて泊まっていくような人たちだった。崩壊状態の家庭は、経済的にも困窮していて、ラモットは、「普通」の家庭に強い憧れを抱きながらも、自らを取り巻く風変わりな環境を、子供の目線で観察するようになる。そして、父親を通して書くことに求められる姿勢やその意味を知っていく。

＊2
Tavis Smiley, "*Interview with Anne Lamott*," (PBS). April 14, 2010. http://www.pbs.org/kcet/tavissmiley/archive/201004/20100414.html.
（二〇一二年一月三十一日取得）

＊3
Anne Lamott, Wikipedia
http://en.wikipedia.org/wiki/Anne_Lamott
（二〇一二年一月三十一日取得）

写真1　作家アン・ラモット
Anne Lamott, *NNDB: Tracking the Entire World*
http://www.nndb.com/people/816/000159339/
（二〇一二年一月三十一日取得）

毎日、少しずつ書くんだ……ピアノでスケールを練習するみたいに。自分との約束事として、準備体操をするように書く。それでたまっていた借金が返せると思って書く。そして、必ず終わりまで書き上げること。　（原文英語　小笠原訳）[*4]

父親はことあるごとにラモットにそう言い聞かせる。どんなに泥酔しても、翌朝五時に起床し、一日の執筆活動を始める父親の姿から、ラモットは手を動かすと、何かを得られることを知っていく。

あるとき、彼女が小学校で書いた詩が認められ、発行されることになった。活字になった作品をみて、ラモットは初めて自分の存在を意識し、興奮を覚えた。彼女が七歳のときのことである。

失ったものから生まれたもの

ラモットは、史上まれにみるほどの激動の時代とともに、十代から二十代を過ごすことになる。一九六〇年代から七〇年代にかけて、アメリカは、大きな転換点を迎えたからだ。学生運動、公民権運動、反ベトナム戦争運動といった社会運動や、フェミニズム、ヒッピーといった潮流があり、それまでの社会の在り方を批判し、人々の意識改革を求めていた。[*5] ラモットも、家庭環境に対する諦めや絶望感、自分の居場所が見つからない社会に対するやり場のない怒りを抱えて、生きることになる。

ラモットが十代の最後の年、父親は脳腫瘍で亡くなった。彼女にとって、人生最大の

*4
Anne Lamott, *Bird by Bird: Some Instructions on Writing and Life*, New York: Anchor Books, 1994, xxii

*5
有賀夏紀・油井大三郎編、『アメリカの歴史――テーマで読む多文化社会の夢と現実』有斐閣アルマ、二〇〇三年

喪失だった。

私たちは人生を通して出会う人、関わりあう人たちにさまざまな思いや感情を無意識のうちに結びつけ、自らの感情の象徴にしている場合がある。ラモットも、自分らしく生きている作家の父親に「自由」の象徴を、不安定な職業で、アルコールでストレスを発散するしかない父親に「不自由」の象徴を見いだしていた。複数の象徴を合わせ持つ父親の存在は、ラモット自身の投影でもあり、生きていく上での支えでもあった。

書くという行為は、喪失感が心の奥底にあってこそ書けるという。喪失感を埋めるためにペンを執り、喪失感が心を掴んで離さないとき、外へとほとばしる表現へ向かっていく。ラモットの場合、父親の存在が大きかったがゆえに、その死によってもたらされた喪失感が書く衝動へと向かわせたのである。彼女のエッセイや小説の根幹には、その失われたものが垣間見える。

生きることと書くこと

失われたものとは何か—それはどのように回復出来るのか—ラモットは、自らの苦痛から書き始め、失ったもの、目をつぶっていて書けなかったことを探していく。そして、それは、何を書くのかではなく、書くという行為のとらえ方にあったと気づく。

自らを律して書くということ——書く作業—それが自分に必要だったことがわかる。お茶を飲むために、お湯を湧かして、お茶を淹れる。でも、必要なのは、お茶ではなく、お茶を淹れるという作業なのだ。書くということも、何かのために書くので

はなく、書くことそのものが喜びなのだと思う

（原文英語　小笠原訳）[*6]

まずもって、座って書く。自らが考えていることを書く。自らの思考や感情を信頼し、言いたいことをいってかまわない。その気づきから生まれたのが、ベストセラーとなった『バード・バイ・バード――書くことと生きることへの指南書』である（写真2）。

「一羽ずつ描こうね」という表題を持つこの作品で、ラモットは、自身の体験を通して、書くことについて、同時に生きるために書くこと、つまり、自分の人生の奥深くまで分け入り、一人の人間として存在するための手段として書くことの大切さを述べる。

書くという作業は、直線的なプロセスではない。ここからあそこまで、あそこからむこうまで、といった論理的な方法は存在しない。書くことに取り組むことは、結局、自分の生のすべてと取り組むことであり、言うべきことを心底から言いたいという姿勢をありのままにみせるということだ。しかし、心の真実を書こうとしても、それは単純なものではない。実際に書いてみること、そして自分を信頼すること、自分の本当の欲求に気づくこと。それがラモットにとっての書くという意味である。

彼女にとってそれは、自分の、あるいは社会が求める枠組みの外に踏み出す行為であったともいえる。自分の限界を突破し、アイデンティティが生きるか死ぬかの、とてつもない不安が直撃するような行為。自らの心をさらけ出す、それが自分の一番自然な状態であったとわかっていても、身にまとっているものを全部とりさって、裸の人間になって、言葉を発し、面白いか、面白くないかを人に判断してもらうことは、ラモットにとって、恐ろしく不安なことだという。

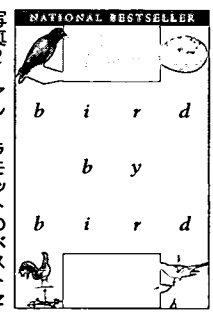

写真2　アン・ラモットのベストセラー、*Bird by Bird: Some Instructions on Writing and Life*（『一羽ずつ描こう――書くことと生きることへの指南』）

*6
Anne Lamott, *Bird by Bird: Some Instructions on Writing and Life*, New York: Anchor Books, 1994, xxvi

しかし、そういった枠から自分の意志で解放されようとすること、その不安を抱えて書くということ、それが自分の存在を確かめる唯一の方法だった。自分の中から湧き上がってくるもの、それをこつこつと書き溜めていったら、世界がありのままの姿で大きく手を広げて待っていることを信じて書く。ラモットにとって、書くことと生きることは、同義語だった。

ラモットの作品には、迷い多い人生に対する慈悲の気持ちから、それを笑い飛ばすユーモアまで、ズタズタになった自分や他人に対する優しさから、それをさらに深く傷つける残酷な罵倒まで、真剣な心の叫びがみえる（写真3）。醜い、見たくない、と思っていた事物に手を触れ、それを否定的なものとしてではなく、自分をとりまく生の一部として、あるがままに表現する。そこには、この人生は他ならぬ自分のものであり、その人生以外になにものも存在せず、それを愛しみたいというスタンスがある。次に紹介する、卒業していく学生たちに送る彼女のメッセージにも、その精神が貫かれている。

【小笠原】

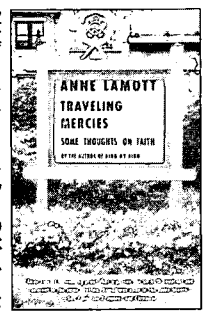

写真3　アン・ラモットのベストセラー、*Traveling Mercies: Some Thoughts on Faith*（「救急飛行--わたしが信じる道」）

二、アン・ラモットのコメンスメントスピーチ

（二〇〇三年六月六日　カリフォルニア大学バークリー校にて）[*7]

ドクター・スーの蛍のように

アン・ラモット
翻訳　小笠原はるの・遠藤昌子

卒業おめでとう。人生最良の日でしょうね。私はいろいろあって大学は卒業できなかったけれど高校は頑張って出ているわ。もう三十年も前の話ね。そうそう、卒業式と言えば、ありえないことだけど、父が卒業証書代をはらっていなかったの。だから式で、証書入れは空っぽで代わりにあったのは脅迫状。「卒業証書が欲しければ、ミセスフォーリーに代金を払うように」。

ともかく、メリーランド州のガウチャーカレッジに入った時は勉強する気満々だったわ。でも、作家になりたくなって十九歳で中退してしまったの。私の本を読んでくださった方は知っていると思うけど、中退後は、しばらく派遣の仕事をした。その一つは、軍需産業の事務の仕事。

書類をタイプしたり、契約書を仕分けたり、たいくつだったけど、食べてはいけたから。それで、会社が終わると毎晩小説を書いていたの。結局、半年働いたけど、会社が

*7 "Let Us Commence," Salon com. June, 7, 2003, http://www.salon.com/2003/06/06/commencement/（二〇一二年一月三十一日取得）

写真4　カリフォルニア大学バークリー校のキャンパス
カリフォルニア大学バークリー校ホームページ
http://berkeley.edu/photo_credit.shtml
（二〇一二年一月三十一日取得）

戦争で暴利をむさぼっていたのとは無関係。今の政権とつるんで金儲けしようとしているのとも無関係。私は、ただ書類の整理をしていただけ。本当よ。

会社のやっていることもひどいし、私の仕事ぶりもひどかったけど、月六百ドル貰えたから、家賃や生活費には十分だったわ。作家になるためなら、プール付きの家やフランス料理はどうでもよく、食べていくために何でもやったわ。そのうち、編集助手として雑誌社で働き始めて、二十歳の時にフリーライターになったの。

ご両親は、わたしの話を聞いて、心配になってきたのではないかしら。作家への夢のために、中退し、職を転々としたことを自慢しているみたいでしょうから。夢を追いかけるようにけしかけられると困るわよね。だって、ご両親がみなさんに望んでいるのは、きちんと卒業して、立派な社会人になること、親孝行してくれること、お金に困らない生活をすること。

でも、ご両親とあなたの願いが同じとは限らない。あなたにとって大切なのは、一度きりの自分の人生の生き方を考えること。世間体を気にして取り繕って生きていくのか、それとも自分らしさを大切にしながら生きていくのか。

私は、作品が出版されるようになって、少し名前が売れ出すと、まだ豊かではなくても、若い頃欲しいと思っていたものはほとんど手に入るようになったの。

若い頃って、良い仕事をして、良い仲間を持って、ちょっと有名になれればそれで十分と思うものよ。私もそう思っていたわ。あとは、健康管理をきちんとすること。

でも、それでは満足できないものなのね。私の場合は何度も原稿が突き返され、失敗を重ね、うまくいくかと思ってもまた振り出しに戻ったり。まさに詩人のラングストン・

ヒューズが言うように「夢とおいかけごっこ」。それでも、書き続け、十五年たってやっと食べていけるようになったわ。

ずっと成功を夢見て頑張ってきたけれど、作品が売れてみると、自分が書いたものは機械仕掛けの兎に思えたわ。外側はふわふわといかにも本物らしくみえたけど、中は冷たかった。血が通わず、魂もなく、見てくれだけだった。でも、わたしがずっと求めていたのは、見てくれではなかった。私は魂がこもった作品を書きたかった。自分をさらけ出しながら書きたかった。それなのに、私の書いたものには心の通い合いや魂のつながりがなかった。

四十九歳の先輩として言わせてもらうと、何か手に入れたいのなら、外を探さず自分の心の中を探すことね。大事なのは、なぜ自分がそれを求めるのか知ること。買ったり、貰ったり、借りたり、奪ったりでは手に入らない。仕事でも手に入らないし、成功しても有名になっても得られない。あの大富豪のロックフェラーでさえ「いくらあったら十分なんだ？」と聞かれると、「もう少しあれば」と答えたんだから。欲しいものはいくらあっても欲しいのよね。わかるかしら。

ご両親は、あなたがたに真面目に働いて幸せになってほしいと願っているのよ。すくなくとも、人並みに幸せであればと。それに、もう少し優しくして欲しいと思っているわ。

親って、自分の子供が人に嫌われず仕事を楽しんでくれれば良いと思うものなの。中には出世しろとうるさく言う親もいるかもしれないけど、ほとんどの親は、まずはがむしゃらに働いて、余裕ができてから、楽に生きてほしいと思うものなのよ。

でも、やるだけやってから、ゆっくり、ゆったり、楽しく生きようと思ってもそうはいかないことがあるわ。そこまで長生きできないかも知れない。自分というものを知る前に寿命が来てしまうかもしれない。よくいわれるように、今日を人生最後の日だと思って生きなければならないのよ。だって、いつかはその日がきてしまうのだから。

じゃあ　自分の本質って何か知りたいと思うわよね。私が教えてあげられたらいいんだけど。わたしにだってわからないのよ。

ただ言えるのは、あなたの本質は、あなたがどんな外見で、どんな体型で、どんな成績で、どんな仕事に就くかとは無関係だということ。うまく言えないけど、こういうことは大学でも勉強したでしょう。ただ、わたしにわかるのは、自分が自分の魂とつながっていると感じられるのは、忙しすぎないとき、自然に触れているとき、心静かにしているとき、それとは反対に、にぎやかでも音楽を聴いているとき。

ベースの響き、ハーモニー、静まった瞬間。ショパンでも、エミネムでも、エミーロー・ハリスでも、バッハでも、好きな音楽を耳にすると魂の本質を心で感じられる。

魂とつながっているときは、神々しい光が身体の中に取り込まれていく。まるでドクター・スーの蛍のように。

異郷で故郷の言葉を聞くと、嬉しくて飛び上がりたくなるわよね。キリスト教でも「魂の本質に触れると喜びがわきあがる」と言われているわ。あなたの魂は蛍のような光を放つの。蛍がピカッと光ったら気付いてあげてね。

人が人を思いやっているときに魂は輝くの。忙しい毎日でも人のためになることをしようとする時に魂は輝くの。どうしようもなく惨めに思える自分をいたわろうとする時

にも魂は輝くの。

輝く魂はめったに目にできない。仮面やホログラムで隠されているから。世間の目とか、家族の目とか、嫉妬の目とか、侮蔑の目とかでごまかし、自分でさえ自分が見えない。

あなたの本質は、経歴や貯金の額で表されるものではない。業績で決まるものでもなく、墓石に刻まれる碑文でもない。あなたの本質は魂の輝きでわかり、どれほど愛があるかなの。今の社会は、ますます息苦しくなっているけれど、あなたは自由で、愛し愛されるために生きているの。人はいつかは死ぬものだから、もし来週、あなたが不治の病と判ったとしても、大切なのは、美しい思い出をいくつ心に刻めたかということ。人に愛され、人を愛し、弱いもの、困っているものをどれだけ助けたかということ。忘れないでね。

では、どうやったらわたしたちは魂を輝かせることができるのかしら。

まず、自分が向かう方向をみつめ、明かりを手にして行き先を照らしてね。どんな教えにもあるように、大切なことは三つ。一つ目はできるだけ今を大切に生きること。二つ目は何か得たいなら種をまくこと。三つ目は困っている人を助けること。

だからといって、なにも海外に行かなきゃだめというわけじゃないのよ。すぐそばに困っている人がいるじゃない。心が傷ついた人とか、仕事でパンクしそうな人とか、病気の子供を抱えている人とか、老後の生活に不安を感じている人とか。中には、一人ぼっ

ちでどうしようもない孤独を抱えている人もいる。どんなにあがいても、平和で平等な世の中にはならないと思って、政治に絶望してしまった人もいる。でも、あなたは、自分ができることをすれば良いのよ。みんながやってきたように、喉の渇いている人には水をあげ、おなかが空いている人には食べ物を分け、ホームレスには寝床を探し、困っている人を助ける。

それから、ユーモアのセンスも大切よ。ビル・マーリーの軍隊コメディー「ストライプ」で、新入隊の兵士が、自己紹介でこういったの。「自分はフランシスであります。しかし、フランシスとは呼ばないでいただきたい。呼んだ暁には生かしておけません。もう一つ、自分の身体に触れないで頂きたい。触れた暁には、生かしておけません。」すかさず上官が言ったのよ。「まあ、フランシス、気楽に行こうや！」

あなたもフランシスみたいに気持ちの余裕が無いときがあるかも。そんなとき、気持ちをほぐしてくれる友達がいると良いわね。ユーモアのある人と一緒だと気持ちが明るくなるから。

ゆっくり休んで笑うと、身体も心も楽になるわよ。笑って休んで立ち止まる。来週から仕事を始める人もいるし、まだ就職活動中の人もいるわね。こんなときに何もしていないほうが、親にとっては不安よね。不安といえば、わたしだってこのスピーチするのが怖かったわ。

まあ、親は勝手に心配していればいいのよ。何が何でもエリート街道を歩ませようと思っている親がいたとしたら。この大学を受験させるといいわよ。例えば、分子細胞生物学の専攻で。こういっちゃ何だけど、どうせ落ちる。ここの教授だって、今なら自分

は合格しないと言ってたし。

さあさあ、こういうときは身体の奥からゆっくりと深呼吸してみて。みんなは今日、卒業するのよね。社会に出て、競争に振り回されないように気をつけてね。気持ちの余裕をもって、周りをよく見るのよ。仕事でもプライベートでも、自分の望まないことを押し付ける人を避けること。社会にはそんな人がいっぱいいるから。余裕があったら、困っている人にお金を寄付してあげてね。

とにかく、できるだけゆっくりして、寝っころがるといいわ。わたしは二十代のころに、リラックス法として「うつぶせヨガ」を思いついたの。すぐにやめちゃったけど。ただ、うつ伏せになっているだけでいい。本を読んでも良いし、音楽を聴いても良いし、ぼんやりしても、寝てしまっても良い。ただうつ伏せになっているだけ。

いよいよ卒業ね。みんな、十分頑張ったわね。無駄な競争には意味がないわ。競争にはまってしまうのは、負け。チャーリー・ブラウンとルーシーがサッカーするときみたいに、戦っても戦っても負けるだけ。人生には他に素晴らしいことがいくらでもあるわ。書くこと、歌うこと、休むこと、さくらんぼを食べること、投票に行くこと。

あら大変。一番大切なことを抜かすところだった。窮屈なパンツは履かないことね。細身でかっこよく見えても、体型があからさまにわかるようなピチピチパンツははかないと約束してちょうだい。パンツまで嘘の塊にしないでね。この社会には、嘘や見栄が溢れているんだから、もうそれで十分。

改めておめでとう。よくやってきたわね。みんなは愛情に包まれて、幸せに生きてきたのよ。これからもそう。身体に気をつけて、思いやりの心を忘れずにね。

わたしの話を聞いてくれてどうもありがとう。

三、スピーチにおけるアネクドート

これまで筆者たちはアメリカの大学における卒業スピーチを翻訳してきたが、[*8] その多くには格言、先人の言葉、パラブルまたはアネクドートと呼ばれる教訓を含む話が含まれていた。簡潔にそれぞれの定義を示すと、格言とは「深い経験を踏まえ、簡潔に表現した戒めの言葉。金言。箴言」（広辞苑）、パラブルとは「たとえ話。寓話」（ジーニアス英和辞典）、アネクドートとは「小話。逸話。奇談」（広辞苑）とされている。このような言葉は洞察に富み、人生を豊かに生きる糧になる教訓が含まれているので、卒業式のスピーチの多くに盛り込まれている。なぜならば、卒業式のスピーチは卒業生への餞の言葉であり、卒業後、彼らが将来を生きる上での指針となるメッセージを含むものであることが期待されているからである。スピーカーは時間をかけて周到に準備するが、多くは自分自身の経験を軸として話を組み立て、その支えとしてこのような格言や教訓となるアネクドートなどを慎重に取り入れていく。それゆえ、卒業スピーチには話者自身の経験談にもましてこのような言葉が強い印象を残しているものがある。

例えば、二〇〇五年にスタンフォード大学で故スティーブ・ジョブズが行った卒業スピーチは、[*9] 彼自身の誕生前のエピソードから始まり、大学を中退したこと、小規模で起業をして成功を納めたことへと続く。その後、一転して自社から解雇された失意の中で開放感を味わう時期があり、やがて、再起業で成功して元の会社への復帰がかなった。

*8
「アメリカの大学におけるコメンスメントスピーチ（一）、J・K・ローリングとオプラ・ウィンフリー」、『比較文化論叢』、札幌大学文化学部紀要　二十三、七―四十二頁、二〇〇九年六月、札幌大学
「アメリカの大学におけるコメンスメント・スピーチ（二）、ディビッド・フォスター・ウォレス、アーノルド・シュワルツェネッガー、バラク・オバマ」、『比較文化論叢』、札幌大学文化学部紀要　二十四、七―六十四頁二〇一〇年三月、札幌大学
「アメリカの大学におけるコメンスメントスピーチ（三）ブランド・ドミンゴ、ブラッドリー・ウィットフォード、ボノ」、『比較文化論叢』、札幌大学文化学部紀要　二十五、八三―一二七、二〇一〇年一月、札幌大学

*9
スティーブ・ジョブズ、スタンフォード大学二〇〇五年卒業式のスピーチ
http://news.stanford.edu/news/2005/june15/jobs-061505.html
スタンフォード大学
（二〇一二年一月二十日取得）

その喜びを味わい、さらに仕事に熱中する。しかし、突然、癌を宣告され死に向き合う経験をした、という彼自身の人生が述べられる。彼の人生の軌跡とその経験から伝えられるメッセージは十分に強い印象を与えるものであるが、それにも劣らないインパクトをもっているのが、最後に紹介された「ステイ　ハングリー、ステイ　フーリッシュ」（ハングリーであれ、愚かであれ）という言葉であった。これは六十年代に刊行されヒッピー世代に熱狂的なファンを持っていたホール・アース・カタログという雑誌が終刊するときに、発刊者が読者に向けて発したメッセージであった。若い頃にこの雑誌を知り、終刊号のこのメッセージを強く心に留めていたジョブズは、自分のスピーチをこの雑誌発刊者の言葉を借りて締めくくったのだった。

また、二〇〇五年にデビッド・フォスター・ウォレスがケニヨンカレッジで行ったスピーチでは[*10]冒頭三匹の魚が登場するパラブルが語られる。そのパラブルで「魚には水が見えない」という一種のなぞ掛けが行われ、そのなぞ掛けの答えに繋がる事例が、スピーチの中で展開されていく。そして魚に水が見えなくなっているのと同様に、根源的に自己中心的存在である人間には他者の存在が見えなくなっている、そのことへの気づきが肝要であるというウォレスのメッセージが導き出されているのである。また同じスピーチでは、もう一つのパラブルが用いられている。それは、無神論者が雪原で遭難し、他に手段が無く、試しにこれまでは信じてこなかった神に祈ってみた。やがて、エスキモーがやってきて彼は救われ助かった、というものである。その話を聞いた信仰心のある友人にはエスキモーが出現した事が神の助けの手であり、神の存在の証であるとみえた。しかし、助かった彼自身は、実際に助けてくれたのは神様ではなかったので、やはり神

＊10　デビッド・フォスター・ウォレス、ケニヨンカレッジ二〇〇五年卒業式のスピーチ http://online.wsj.com/article/SB122178211966454607.html ウォールストリートジャーナル紙（二〇一二年一月二十日取得）

様はいないのだと結論づけるに至る。そしてウォレスはスピーチの中で、このパラブルが示唆するのは、起きた物事はそれをどのように解釈するかでまったく異なった意味合いを帯びる、だから重要なのは起きた物事をどう解釈するかであると語りかけている。このようにパラブルやアネクドートは、伝えたいメッセージを鮮明で具体的にイメージできるものにして、効果的な印象を与えるために用いられている。

本稿で翻訳を紹介するテキサス大学臨床心理学部准教授マーク・ルイスのスピーチにおいてもアネクドートが主要な役割を占めている。彼のスピーチは三つの話で構成されていて、冒頭に綱渡り師のアネクドート、次にはルイス自身の人生経験、最後に英国スキージャンプ選手についてのアネクドートが紹介されている。スピーチの大部分をアネクドートが占めているが、これは、臨床心理学の分野では多くの実例を挙げて講義が行われるという事と関連しているのではないかと思われる。

つぎに、ルイスが二〇〇六年に同大学心理学部卒業式で行ったスピーチで引用した綱渡り師についてのアネクドートについて、その背景と他のスピーチなどでの使用例を紹介する。

綱渡り師チャールズ・ブロンディンについてのアネクドート（写真5）

ブリタニカ百科事典によると一九二四年フランス生まれのチャールズ・ブロンディン（本名ジャン・フランシス・グラバレ・ブロンディン）は、五歳から綱渡りを仕事としていた。ギネス記録でも認定されているように、[*11] 一八五九年六月三十日に世界で始めて

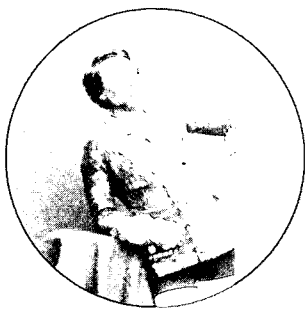

写真5　十九世紀中頃のブロンディンの写真
ヴィクトリア・アルバート博物館
http://www.vam.ac.uk/content/people-pages/blondin/
（二〇一二年一月二十日取得）

ナイアガラの綱渡りを行った。ナイアガラでの成功をきっかけに世界中に名声が広がり各地でパフォーマンスを披露し、六十八歳まで現役として活動し七十三歳で亡くなった。長い生涯に行った数々の偉業のためにブロンディンという名前は綱渡り師の代名詞となり、彼をモデルとした演劇や歌が製作され、英国では彼の名前を関した綱渡り大会が行われている。[*12]

彼の業績の概観を英国ヴィクトリア&アルバート博物館の資料はこのように紹介する。[*13]

ナイアガラの滝での綱渡りに成功するのはたった一回でも大変な事だが、それを十七回も成功させるのは超人業といえよう。しかし、ブロンディンの偉業はそれだけに留まらない。

史上初めて、キャバリエ・ブロンディンが一八五九年六月三十日にナイアガラの滝の水面から五十メートルの高さに張った綱を渡った。距離は五百メートル弱でロープは直径七・五センチであった。本当は彼はさらに一キロ上流で綱渡りする事を望んだが、事故を恐れた関係者が許可しなかったのだ。成功してからも、ブロンディンはナイアガラでの綱渡りを続けたが、次第により難しい状況で挑戦するようになっていった。ある時は、目隠しをして、ある時は手押し車を押しながら、またあるときは調理器具をもってわたると途中で止まり、綱上でオムレツを作って食べた。またある時は竹馬に乗って渡った。一八五九年八月には自分のマネジャー、コルコード氏を背負って渡った。伝えられる話では、コルコード氏は背負われての綱渡りを非常に恐ろしく思ったという。ある時、張り綱が破断してしまい、ロープは激しく

*11
ギネス世界記録、http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,837603,00.html
（二〇一二年一月二十日取得）

*12
ミュージカル、ブロンディン、http://www.blondinmemorialtrust.com/book.html ブロンディンメモリアルトラスト
（二〇一二年一月二十日取得）

*13
ヴィクトリア・アルバート博物館、ブロンディンの紹介記事
http://www.vam.ac.uk/content/people-pages/blondin/
（二〇一二年一月二十日取得）

揺れ、途中で彼はブロンディンの背中から降ろされてしまい非常に恐ろしい思いをしたのだった。一八六〇年には英国皇太子がブロンディンのナイアガラ綱渡りを見物したことがあって、その時、背中に乗って向こう岸まで戻りませんかと誘ったものの、皇太子にはみごとに断られてしまったという。（原文英語　遠藤訳）

ブロンディンの偉業は長く語り継がれるものとなったが、中でもナイアガラの滝での一輪車にマネジャーを乗せて綱渡りをしたというアネクドートからは、「手押し車に乗る決断」、「手押し車に乗り込む瞬間」という言葉が作られ、恐怖心や不安感を乗り越えて前に進もうとする決意、勇気を振り絞って前に進まなければならない瞬間を表す表現として使われている。アネクドートそのものも多くの啓発スピーチや経営セミナー、コーチングなどの場や政治家のスピーチなどで広く使われるものとなっているが、[*14] このアネクドートが使われた例を数例紹介する。

最初に取り上げるのは、ブロンディンがナイアガラでの綱渡りを成功させてからわずか数年後一八六四年にリンカーン大統領によって行われたスピーチである。アメリカでは一八六〇年にリンカーンが大統領に選出され、奴隷制などを争点に一八六一年に南北戦争が開始されて以来、北軍と南軍の戦いが続いていた。そのような社会状況で行われた、リンカーンによる北軍向けの演説にブロンディンのアネクドートが引用されている。[*15]（写真6）

＊14
ESPNのHP、NBA関連コラム
http://sports.espn.go.com/nba/dailydime?page=dailydime-060621
（二〇一二年一月二十日取得）

写真6　マネジャーを背負うブロンディン
http://en.wikipedia.org/wiki/Charles_Blondin
The New York Times Published: February 23, 1897
（二〇一二年一月二十日取得）

紳士諸君、皆さんの所有物をすべて黄金に変えて、ブロンディンの手に渡すとしよう。彼はこれからそれをもってナイアガラの綱渡りをするのだ。そんな時に、綱を揺らそうとするだろうか？　あるいは「もう少しまっすぐに立って！　もう少し背を丸めて！　もう少し早く歩いて！　もう少し北の方角に身体を傾けて！　もう少し南の方角に身体を傾けて！」などと野次るだろうか。彼が向こう岸に安全に渡りきるまで、じっと黙って息もひそめているに違いない。綱を揺するはずも無いだろう。

いま、政府は責任の重い大変な仕事を担っている。貴重な富を手中に最大限の努力をしているのだ。雑音で悩ますことはやめて欲しい。そっと見守ってくれたら皆さんを安全に向こう岸に連れて渡れるのだ！（原文英語　遠藤訳）

リンカーンの演説はその後の多くの大統領が好んで引用するものとなったが、中でもリンカーンを頻繁に引用する事で知られていたのがジョンソン大統領であった。彼はベトナム戦争時の一九六七年には、戦争への賛否でアメリカ中が揺れる中で、戦争に注力する政府に協力を呼びかけようと、南北戦争時のリンカーン大統領の演説に倣って、自らの演説にブロンディンの例をあげている。[*15] 十九世紀に活躍したブロンディンは忘れ去られることなく、そのアネクドートは現在でも卒業スピーチに用いられている。

例えば、二〇一一年のコロラド大学農学部の卒業式スピーチでも、スピーカーのロバート・ジンダール名誉教授はブロンディンのアネクドートをスピーチの中心的な話題とし

*15 リンカーンの演説の引用文、リンカーン演説引用文サイト http://www.aboutabraham lincoln.com/quotes/（二〇一二年一月二十日取得）

ている。[16] ルイスのスピーチとおなじアネクドートを語った後で、こう続けている。

ブロンディンを見ていた観衆が急に手押し車に乗るように言われて驚いたように、人生には驚きがつきもので、しかも、人生は思い通りには行かないものなのだ。いま計画しているとおりにはならないのだ。私の人生も計画通りにはいかなかった。いかに大学での知識があろうとも、皆さんにも自分が手押し車に乗るかどうかを決めなければならない瞬間がやってくるのだ。友達や親や祖父母に相談してもいいけれど、最終的には自分を信頼して、直観を信じて、恐れる気持ちを抑えて手押し車に乗り込まなければならない。（原文英語　遠藤訳）

二〇一一年、マサチューセッツ州パーキンス校の単位認定式では、校長がブロンディンのアネクドートに加えてこう語った。[17]（写真7）

誰にもそんな瞬間があるのです。これほど劇的ではないかもしれないけれど。でも誰にも、手押し車に乗る決断を迫られるときがあり、自信が揺らぎ、どうすれば良いか分からなくなる時があるのです。自分や周りの人を信じていても、どう決断したらいいのか迷ってしまう事がある。何が待ち受けているのか、成功の可能性はあるのか、将来自分がどうなるのか。決断を迫られるときには、成功を確信する一方で誰もが不安を抱えるものなのです。でも、そういうものなのです。人間には考える力があるからこそ、警戒もし、計算もするのです。

＊16
コロラド大学農学部　二〇一〇年卒業式のスピーチ
http://www.colostate.edu/Dept/bspm/Commencement%20Address.pdf#search='blondin tightropespeech'
（二〇一二年一月二十日取得）

＊17
パーキンス校二〇一一年卒業単位認定式のスピーチ http://www.telegram.com/article/20110624/COULTER01/106249963/1189/coulter10
コルタープレス紙
（二〇一二年一月二十日取得）

危険を冒そうとするときには注意深くなり、きちんと考えるのです。自分や周りのひとの健康や安全に気を配るものなのです。目標達成の可能性とリスクを考えた上で計算された合理的決断を下すのです。たとえ私がナイアガラの綱上の手押し車に乗るようにといわれた観衆だったとしても、さっと飛び乗っていたとは思いません。それこそ、究極の挑戦ですから。日常で重要な決断を迫られるのは、もっと普通の事に関してですが、重要性では劣りません。そんな時に心の奥底に、自分はたいした事がないかもしれない、頭が良くないかもしれない、好かれてないかもしれない、そんな気持ちがくすぶるものなのです。そんな時には、分析することです。何が問題なのかはっきりさせ、その問題を解くには、自分のどんな能力や才能を使えば良いのか考えるのです。（原文英語　遠藤訳）

二〇一〇年に日本で出版された『二十代にしておきたい十七のこと』という本でもブロンディンのアネクドートが紹介されている。[*18] この本では、ブロンディンの親友が友情のために手押し車に恐怖を乗り越えて乗り込むという設定になっていて、友情の大切さに焦点がシフトされているのが興味深い。

事前に載った新聞広告を見て五千人の人が集まり、綱渡りの達人は観客に「私が無事に渡れると信じる人はいますか」と聞きます。観客は拍手で信じていることを示し、彼はそれをやり遂げます。次に観客の前に戻ってきた達人は「私が手押し一輪車で渡れると信じる人はいますか」と聞きます。観客はまた拍手で応援しまたも

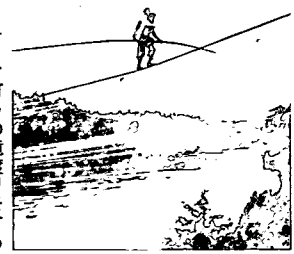

写真7　ナイアガラの滝渡りをするブロンディン
http://www.nflibrary.ca/nfplindex/show.asp?id=893098&b=1
Niagara Falls Historic Image digital collection
（二〇一二年一月二十日取得）

*18
本田健、『二十代にしておきたい十七のこと』、大和書房、二〇一〇年

彼はそれをやり遂げます。そして最後に「私が誰かを背負って渡れると信じる人はいますか」と達人は観客に聞きます。観客はさらに大きな拍手で信じていることを示しますが「誰か私の背中に乗る人はいますか」この質問に誰一人拍手を送る人はいませんでした。しかし、彼の親友が、自分が彼の背中に乗ると言います。そして彼は無事ナイアガラを渡りその親友はおんぶされてナイアガラを渡った初めての人となりました。私はこの話がとても好きです。まさに親友とはそういうものだと思うのです。親友を信じて例え命を落としてもかまわないと思えるような自分でありたいしそんな親友を持ちたい。その存在は、あなたの人生に言葉では表せないほどの勇気を与えてくれるはずです。あなたには背中に乗ってくれる人がいますか？

（第六章より引用）

このように、一九世紀に活躍したブロンディンのアネクドートは、様々な場面で、様々な時代の人によって、様々な解釈で語られてきている。次には、ブロンディンのアネクドートから始まるマーク・ルイスの卒業式スピーチの翻訳を紹介する。【遠藤】

四、マーク・ルイスのコメンスメントスピーチ

（二〇〇〇年五月一九日テキサス大学オースティン校にて）（写真8、9、10）[*19]

「ああ　最高だったね！」

マーク・ルイス
翻訳　小笠原はるの・遠藤昌子

今日は本当に起きた話を三つしましょう。どれもいつの日かみなさんにとって必要な道標になると思うので、どうぞ聞いてください。最初の話は、綱渡り師のエピソードです。

最初の話「綱渡り師」

一八五九年のことです。ブロンディンという綱渡り師がナイアガラの滝を渡ってみせると宣言しました。そんなことをした人はそれまで誰もいませんでした。評判をよんで、イギリス皇太子など約五千人もの人が見物にやってきました。

ブロンディンは、綱の真ん中まできて突然止まりました。バランスを取ったと思うと宙返りをし、見事綱に着地して、最後まで渡りきったのです。同じ年に、彼は何度も何度もナイアガラの滝を渡ってみせました。目隠しをしていたり、だるまストーブを抱え

*19 テキサス大学オースティン校ホームページ
http://www.utexas.edu/
（二〇一二年一月三十一日取得）

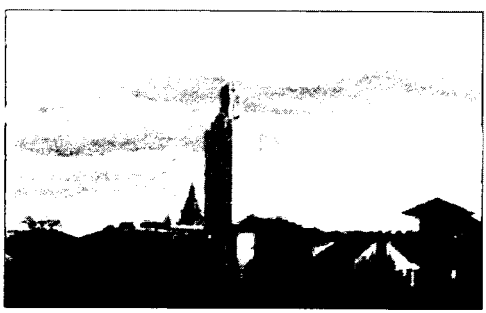

写真8　テキサス大学オースティン校キャンパス
テキサス大学オースティン校ホームページ
http://www.utexas.edu/
（二〇一二年一月三十一日取得）

てみたり、身体に鎖を巻きつけたり、ある時は自転車に乗って。

それからも次々と挑戦するのです。今度は乳母車を押しながら綱を渡るというのです。ブロンディンは、綱渡りの前に見物客にこう聞きました。

「乳母車を押しながら渡れると思う人？」

みんなが手を上げました。ブロンディンはその中の一人を指差してこう聞きました。

「あんたも出来ると思うのかい？」

「もちろんさ。」

「絶対に？」

「絶対さ」

「良かった。じゃあ、乳母車に乗ってくれ！」

もし皆さんがこの男性と同じ立場だったらどうでしょう？　皆さんは最高の大学の、最高の心理学部で、最高の教育を受けてきましたね。頭では大丈夫だと思えます。しかし、男性と同じく、頭でできると思っていても、実際にやってみようとすると、怖くなってしまうのではないでしょうか。それでも、人生には、乳母車に乗るかどうか決めないといけない時があるのです。

二つ目の話はいかにそういった決断をするかについてです。僕自身が三十八年間賭けをしてきたという、ちょっと変わったお話をしましょう。

二つ目の話「三十八年間の賭け」

僕は昔、シンシナティに住んでいて、幼馴染のカールとベンとよく一緒に遊びました。

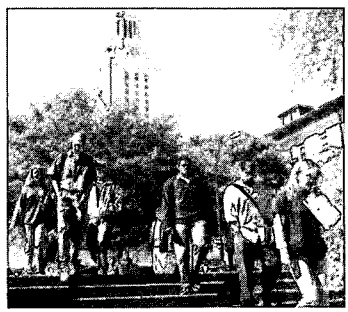

写真9　テキサス大学オースティン校キャンパスの学生たち
テキサス大学オースティン校ホームページ
http://www.utexas.edu/
（二〇一二年一月三十一日取得）

一九六二年のある日、三人で人生ゲームをしていた時のことです。ゲーム版の上で駒を進めながらお金や不動産を集めていくモノポリーと同じようなゲームで、名声や幸福、お金をあらわす星やハートやドルを集めるものでした。子供のときに皆さんも遊んだことがあるでしょう。

そのうち、勝負が決まりました。勝ったのが誰だったかは覚えていませんが、勝った者がいい気になり、言い争いになりました。最終的には、誰が一番有名になって、幸せになって、お金持ちになるか、賭けをすることになったのです。その日から三十八年後、うるう年の二〇〇〇年の二月二十九日正午に会って、互いの人生を語り合い、誰が一番か、決めることになりました。名声と幸福と財産を一番多く手にした人が、シンシナティで一番のレストラン、メゾネットでみんなにご馳走するというものです。メゾネットは、全米でも十一軒しかない五つ星レストランの一つです。さぞかし優越感に浸れることでしょう。

カールは一番成功して賭けに勝つと思われていました。クールでかっこよく、高校、大学と卒業して、派手なスタートを切りました。名声も幸福も財産も手に入れたのです。彼はニューヨークに行き、犯罪組織の中でのし上がりました。リムジンを乗り回し、豪邸に住み、ヨットまで持ち、街では知られた顔で、いつも美女を引き連れていました。ところが、ある日、密輸入品を積んだ彼の貨物船が沿岸で座礁したのです。カールは沿岸警備隊につかまる前にかろうじて逃げ出しましたが、一夜にして財産をすっかり失いました。人生で初の挫折を味わったカールは、シンシナティに逃げ帰って、テレビカメラマンとして働き始めました。自分は三十五歳までは生きられないといっていたとおり、

写真10　心理学者マーク・ルイス
http://www.psy.utexas.edu/psy/faculty/lewis/lewis.html
テキサス大学オースティン校ホームページ（二〇一二年一月二十日取得）

一九八二年のハロウィーンの夜に酒酔い運転の事故で亡くなりました。三十四歳でした。

ベンは、凄腕の営業マンでした。カールが亡くなった一九八二年には、広告代理店を始めました。三十人の従業員を抱え、売り上げは二千万ドルを超えるほどに成長させました。事業を拡大して、何年かたったある日、ベンは仕事以外に何もしてこなかったことに気づきました。彼はすぐに、会社を売り払い、そのお金を自分の子供の信託基金にして、インドに旅立ちました。戻ってくると、スラム街の学校教師になりました。ただ、最初はうまく教えられず一年で首を切られました。めげるどころか、初めての挫折を面白がって話してくれたことを覚えています。そののち、いくつも仕事をして、どれも上手く行くようになりました。というのも、物を売る才能と人を助けたいという気持ちがうまく組み合わさったからです。今では、大企業のビジネスコミュニケーションを円滑にするためのチームワーク作りに携わっています。なにか問題が起きるたびに、どうしたら協力して働けるかを指導するのです。それで一日に数千ドルも手にするのです。

さて僕はというと教える仕事に就きました。三十八年の間一度も自分が賭けに負けると思ったことはありませんでした。ベンやカールよりも自分のほうが成功すると思っていたわけではなく、僕より満たされている人がいるとは思えなかったのです。たくさんの学生の前に立ち、自分が次に言う言葉が彼らの人生を永久に変えると思えるのが、至福の喜びでした。その喜びがあるから、ベンもカールも、それをしのぐものは手にできないと思ったのです。

三十八年の間にいろいろありました。それぞれ出世したり、転職したり、結婚したり、離婚したり、怪我をしたり。そのたびに、賭けの勝ち負けが頭をかすめました。誰が勝っ

てもおかしくなかったのです。みんな山も谷もある面白い人生をおくっていました。いろいろなところに旅をして、思ってもみないような暮らしをしたり、危険な思いもしました。三人とも結婚し、三人とも離婚し、三人とも再婚しました。子供も生まれ、大金持ちにもなり、一文無しにもなりました。それぞれ順番は違うのですが、誰もがおなじ経験をしたのです。それが面白かったのです。

みんなが互角だったこともあって、ベンが四十歳の誕生日にスカイダイビングをすると知ったとき、僕も一緒に飛び降りました。後々、それが原因で、賭けに負けたくなかったからです。といっても、特に勝ちたいと願っていたわけではなく、負けたくなかっただけです。

そうして、約束の二〇〇〇年になったとき、ベンも僕もどうやって勝ち負けを決めたらいいのか、悩みました。賭けをした時には、何が成功かを知っているつもりでしたが、今になって、それでは測れないとわかったのです。驚きでした。人生を歩み始めたときは、成功というゴールにたどり着くことだけを考えていました。三十八年たってみると、ゴールそのものが変わってしまったのです。

賭けをしたからこそ気づけたのです。もちろん賭けをしなくたって、人生のある時点で、自分たちが成功したかを考えたでしょう。でも、賭けをしなかったとしたら、成功をはかる物差しも決めていなかったでしょうし、長い年月を経て成功を意味するものが変わってきたことにも気づかなかったでしょう。

二〇〇〇年の二月二十九日にベンと僕は賭けの勝者を決めるために母校で会うことにしました。その数ヶ月前に、母校の進学クラスの生徒に勝敗を決めるお手伝いを頼みま

した。彼らからは、成功についてのエッセーを書くようにいわれ、そのエッセーを一ヶ月前に提出したところでした。当日になると、僕たちは生徒たちから面接を受けました。水着コンテストのように、ありのままの自分をさらけ出すものでした。新聞、雑誌、テレビの記者が集まっていました。子供が賭けをすることはよくありますが、大人になってもそれを続けているのは僕たちぐらいだからです。勝っても負けてもたいしたことは無いはずですが、メディアで報道されたら全米の笑いものになるかもしれません。

後輩の質問に答えてみて、ベンも僕も成功とは何かについて学んでいたということがわかり、驚きました。それは名声とも幸福とも財産とも違っていたのです。それは、未知なるものへの不安をどう克服するかということでした。先ほどの綱渡り師の話にでできた群衆の男のように、乳母車に乗ってくれといわれたときに、どうするかということです。ベンも僕も、そんな局面を何度も体験してきました。そんなときには、どんなに知識があっても役に立たないのです。大切なのは、どれだけ怖くても、恐怖心に打ち勝って、向こう岸に渡り着きたいと強く願えるかです。

ベンは事業を辞めたときに乳母車に飛び乗ったといえるでしょう。無一文のまま新たな人生に挑戦したのです。僕はといえば、十年前にインドで到底助けを呼べない人里はなれた場所で足を折ったときでした。病院にたどり着くまで二週間かかりました。大学で教えていたら経験することのない生と死について、身をもって学んだのでした。カールにとっては全てを失ったときが乳母車に乗るチャンスでした。もう少し、長く生きていられたら、成功していたかもしれませんが、今となってはわかりません。森の中の鳥だって巣から落ちますよね。カールも優秀でしたが、たまたま飛び損ねてしまったのか

もしれません。

カールはどん底に落ちて人生をあきらめました。一方、仕事を失ってどん底に落ちたベンがくじけずに、それを楽しんだのはどうしてでしょうか。それはきっと、彼が、最初にお話した成功とは何かということと、これからお話する人生を豊かにおくる秘訣を知っていたからです。三つ目の話は、人生を豊かにおくる秘訣についてです。賭けの結末がどうなったかについては後にして、まず、オリンピック史上最低といわれたスキージャンプ選手について、話をしましょう。

三つ目の話「オリンピック史上最低といわれたスキージャンプ選手」（写真11、12）

エディ・エドワーズは一九八八年カルガリーオリンピックに唯一イギリスから出場したスキージャンプ選手でした。優勝した選手が一二三メートル飛んだのに対して、エディの記録は七十二メートルでした。借り物のスキーウェアを着て、ゴーグルをテープで固定して飛んだのです。五十六人が飛んだうち、五十六番目だったので、物笑いの種になりました。テレビではこき下ろされ、レポーターには馬鹿にされました。しかし、エディは恥ずかしいそぶりも見せませんでした。

「人生最良の日だった。だってイギリスを代表してオリンピックに出たんだから。七十二メートルも飛んだんだよ。たいしたことだよね。」

エディはご機嫌でした。そのうちにエディがイギリス初のオリンピックスキージャン

写真11　ジャンプ競技中のエディ・エドワーズ
BBC放送http://www.bbc.co.uk/gloucestershire/content/articles/2008/02/13/eddie_the_eagle_feature.shtml（二〇一二年一月二十日取得）

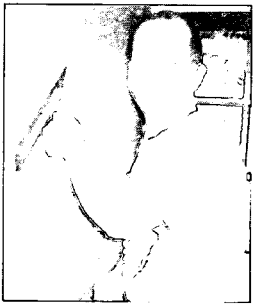

写真12　オリンピックから数年後にインタビューに答えるエディ・エドワーズ
BBC放送http://www.bbc.co.uk/gloucestershire/content/articles/2008/02/13/eddie_the_eagle_feature.shtml（二〇一二年一月二十日取得）

プ選手だと誰かが気付きました。当然、エディの記録は、イギリス最長記録となったのです。それがわかると、エディの人気は沸騰しました。

その後数年間、エディはコマーシャルに出るなどして、金持ちになりました。それから、不運に見舞われました。まずは、投資の失敗で資金を失い、一九九二年のオリンピックにも飛距離が足りなくて出場できませんでした。さらには、オリンピック大会の後に行われた競技会で転倒してしまったのです。頭蓋骨にひびが入り、鎖骨と肋骨を骨折し、膝の靭帯を切断し、肝臓にも損傷を受けたのです。

僕が最近エディにあった時、彼は自宅でジャンプシミュレーターにのって練習をしていました。何千キロも離れた場所にある本物のジャンプ台で練習するのとは大違いです。脚光を浴びなくなった今、エディは昔の栄光についてどう語ったでしょう。

「カルガリー？　ああ最高だったね。八歳からの夢だったから。それ以来、楽しい毎日だよ。世界中をまわって、たくさん面白い場所に行って、たくさん面白いことをして、たくさん面白い人にあった。なかなかできないよね。」

それでは賭けの話に戻ります。僕が賭けから学んだこと、そして今君たちに伝えたいことをとっくにエディは知っていました。人生、上手く行くときも行かないときもある。でもそれでは成功を測れない。成功したかどうかはやったことを自分がどう思うかなのです。別な言い方をしてみましょう。幸せになるには自分を好きになることです。そして自分を好きになるには自分が納得できることだけをすることです。

上手くいかないとわかったとき、ベンは全てを投げうってやり直しました。すぐ上手くいったわけではありませんが、やり続けました。一度として彼は自分が失敗したとは思っていませんでした。努力を重ねていたことに満足していたからです。一方、カールは犯罪に手を染めていたので、人生が上手くいかなった時、むなしい気持ちしかなかったでしょう。もともとまっとうな人生を送っていかなかったからです。周りから落伍者の烙印を押され、自分でもそう思ってしまったのです。

幸せになるには自分自身を好きになることです。そのためには、嘘をついたり、騙したり、怖いからといって逃げてはいけないのです。昔からいわれていることがあります。「どこに行こうと、自分がついてくる。姿をくらまそうと、自分からは逃げられない」そのとおりですよね。人生で一番長く付き合うのは自分自身ですから。だから自分が嫌いだと、長い時間嫌いな人間と過ごさなければなりません。

ついに僕たちは、高級レストラン、メゾネットに行って、賭けを終わらせることにしました。四時間かけて、何本もビンテージワインをあけながら、十二コースのディナーをたいらげて、ディナー代の六百ドルは折半にしました。これを聞いて、結果は引き分けだったんだと思ったら、僕がいいたいことは、伝わっていません。

僕たちは二人とも何が成功かがわかったのです。ですから二人とも成功したといえるでしょう。だから最初に決めたように、勝った人が相手にご馳走するということで、僕たちは互いのディナー代を支払ったのです。

いままでの話をまとめましょう。たくさんの人が皆さんの将来を期待しています。僕もそうです。皆さんに三つの希望を言っておきます。

一つ目は、人生には、自分を信じて、やってみなければわからないときがあるということ。そんな時には思い切って乳母車に飛び乗ることです。

二つ目は、今、思ってる成功の意味が変わることもあるということ。そんなときは、感謝の心と謙虚な気持ちで受け入れてほしいと思います。

最後に、皆さん、エディのようになってください。自分に納得できることだけをしてください。そうすれば自分らしく生きられます。

話したいことはこれで終わりです。成功しようが失敗しようが、何でも経験してみることです。仕事でも、エディのようにスキージャンプでも、時にはどうにもならないことがあります。そんな時でもエディのようにカメラに向かってにっこりと笑ってください。そして自分を受け入れて、たとえカメラがいなくなっても、こういうといいでしょう。「ああ　最高だったね！」って。

＊20
トーマス・フリードマン『レクサスとオリーブの木――グローバリゼーションの正体』上・下、草思社、二〇〇〇年

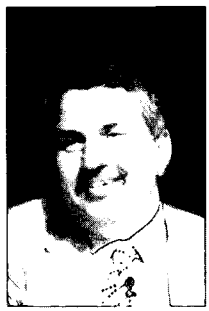

写真13　トーマス・フリードマン
Thomas Friedman, http://en.wikipedia.org/wiki/Thomas_Friedman
（二〇一二年一月三十一日取得）

五、トーマス・フリードマンについて

一九九九年『レクサスとオリーブの木』という一風変わったタイトルの本が世界的なベストセラーとなった[*20]（写真13、14）。ニューヨークタイムズのコラムニスト、トーマス・フリードマンによる著書である。レクサスはトヨタが威信をかけて世界に送り出したブランド車で、技術のシンボルを表し、オリーブの木は、その土地や収穫が誰かの所有になっているもののシンボルである。世界はレクサスとオリーブの木に象徴されるようなグローバルな市場における競争と協調によって成り立ってきた。これがフリードマンのいう「グローバリゼーションの正体」で、その本の副題にもなっている。

その後、ITの進化とそれに伴う社会の変化、つまり国や企業のグローバル化から個人のグローバル化が進んだことによって、さらに社会に変革がもたらされた。フリードマンは、この状態を「フラット化」と呼び、自著『フラット化する世界』で、グローバリゼーションが究極なまでに発達した世界でどう生きていくかを提示する[*21]（写真15）。社会のフラット化現象をつぶさに観察、指摘し、ときに警告をならしながらも、グローバル化自体は肯定し、その変化に適応するための条件や方法をジャーナリストとしてわかりやすく述べたことが、大きく評価されてきている。

フリードマンは、一九五三年、アメリカのミネソタ州ミネアポリスに生まれた。ブランダイス大学を卒業後、オックスフォード大学に進み、中東学で修士号を取得したのち、UPI通信に入って、一九七九年から一九八一年までベイルート特派員をつとめた。そ

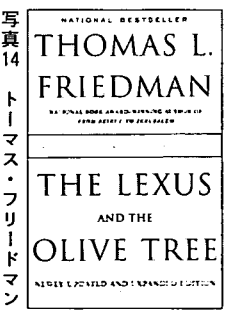

写真14　トーマス・フリードマン『レクサスとオリーブの木――グローバリゼーションの正体』上・下、草思社、二〇〇〇年

＊21
トーマス・フリードマン『フラット化する社会』上・下、日本経済新聞出版社、二〇一〇年

写真15　トーマス・フリードマン『フラット化する社会』上・下、日本経済新聞出版社、二〇一〇年

の後、ニューヨークタイムズの記者として、国際関係や外交政策問題を手がけてきた。イスラエルによるレバノン侵攻をはじめとした中東情勢やテロ活動を精力的に取材し、ピューリッツァー賞を三度受賞している。

一流の記者らしく、インタビューを通して生きた発言をとりあげて論じていくその手法にはストレートな説得力があり、次に紹介するスピーチでも、きたる社会で個人が生き延びていく方法をわかりやすく示している。

六、トーマス・フリードマンのコメンスメントスピーチ

（二〇〇五年六月五日　ウィリアムズカレッジにて）[*22]（写真16）

フラット化する世界で特別な人になる

トーマス・フリードマン

翻訳　小笠原はるの・遠藤昌子

二〇〇五年の卒業生の皆さん、こんにちは。私は長い間ジャーナリストとして多くの経験をしてきましたが、今日は、これまで生きてきて何かの拍子に学んだことをお話しします。野球選手のヨギ・ベラは「よく見るとたくさんわかってくる」、だったか「よく聞くとたくさん見えてくる」といったのですが、私も記者として、いろいろなことを見聞きしてきました。それをここでお話しようと思います。

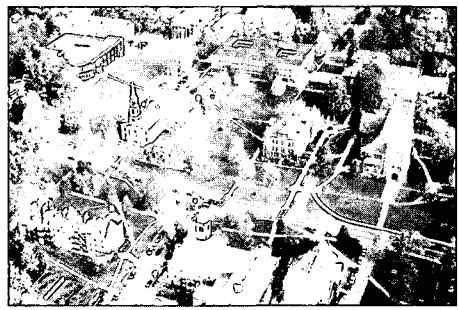

写真16　ウィリアムズカレッジのキャンパス

Alissa Figueroa, "Williams College: America's New Best College," *The Christian Science Monitor*, August 12, 2010
http://www.csmonitor.com/Business/new-economy/2010/0812/Williams-College-America-s-new-best-college
（二〇一一年一月三十一日取得）

＊22　ウィリアムズカレッジのホームページ
http://www.williams.edu/
（二〇一二年一月三十一日取得）

レッスン一

卒業式のスピーチでは、好きなことをして生きていくべきだ、といわれるが、それはもっともらしく聞こえるけれど役に立たない、と作家のダン・ピンクがニューヨークタイムズで書いていました。しかし、私は好きなことをして生きていく事にこそ命をかけて欲しいと思います。なぜなら、世界はフラット化しているからです。ご両親は驚いていますね。何千ドルも払って、子供をウイリアムズにやったというのに、卒業式の日に世界はフラットだということを聞くはめになるとは。

世界がフラットになってきているのは、コンピュータが人の代わりに仕事をし、ネットワークを通じて、安く、能率よい仕事がどこでもできるようになったからです。世界がフラット化すればするほど、好きなことをするべきです。ピンクがいうには、フラット化した世界では、たいくつな単純作業はコンピュータで処理されるかアウトソーシングされます。コンピュータでもアウトソーシングでもできないような仕事こそ貴重で、人間らしい感性のひらめきや情熱や想像力が求められます。そういう仕事はやっていても楽しいと思えるものです。

世界がフラット化する時代にこそ、貴重な存在が求められます。貴重な存在とは、コンピューターでもアウトソーシングでもできないような仕事をする人のことです。インドや機械ではできない仕事です。ではどんな人が貴重なのでしょうか？　まずはマイケル・ジョーダンやバーバラ・ストライザンド。彼らの才能は特別です。ほかにもいますね。脳外科医、デザイナー、コンサルタントやアーティスト。それから、それぞれのフィー

ルドで仕事をしている看護師、美容師、シェフなど。さらには、私たちの多くに当てはまりますが、社会の変化に柔軟に応じられる適応力のある人のことです。

私たちはマイケルにもなれるし、看護師にもなれるし、適応力のある存在にもなれます。ピンクが言うように好きなことをし、やっていることが好きであれば、好奇心や感性や喜びを仕事に生かすこともできるのです。

それがわかったのは、たまたまとったライティングの授業でした。高校二年の時です。名物教師のハティ・ステインバーグから親と同じぐらい大きな影響を受けました。ハティに教えられて、書くことに目覚めたのです。ハティは当時六十歳に近く独身でした。見た目もぱっとしませんでしたが、私たちはみんな書くことに夢中になりました。人気DJのごとくハティはみんなに囲まれ、彼女がいる教室はたまり場となりました。それが私にとっては最初で最後のライティングの授業でした。

同じ頃、両親が冬休みにイスラエルに連れて行ってくれました。その時から中東が大好きになりました。高校の新聞に最初に記事を書いたのもその頃でした。六十七年戦争に活躍したイスラエルの軍人エリアル・シャロンがミネソタ大学に講演に来ていたのです。その時は、将来、何度も彼とかかわりを持つとは思いもしませんでした。

とにかく、高二の終わり頃になっても将来何をしたいか、わかっていませんでした。でも何が好きかはわかっていました。書くことと中東です。その頃、ミネソタのごく普通の家の子供は地元の大学に行くのが一般的でした。私も友達と同じくミネソタ大学に入りました。違っていたのは、アラブ中東地域研究を専攻したことです。当時ミネソタ大学ではノルウェー語やスウェーデン語を勉強している人はいましたが、アラビア語は

あまりいませんでした。でも私は楽しいと思いましたし、両親もそれでいいと思っていました。私が楽しんでやっていたからです。ただ、両親の知人にはいつも聞かれました。「アラビア語を勉強してるって聞いたけど、どうするつもり？」正直言ってそれを聞くたびに厭になりましたが、やっていて楽しかったし、そのために大学はあると思っていました。

そののち地中海研究を専攻し、卒業後はオックスフォードの大学院に行きました。イギリスに行った最初の年一九七五年に、当時恋人で今の妻であるアンと町を歩いている時にイブニングスタンダードというタブロイド紙の一面の見出しが目に入りました。

「カーターよりユダヤ人に告ぐ〝大統領になったらキッシンジャーを更迭する〟」

おかしいなと思いました。フォードに対抗して大統領選挙にカーターは出馬したのですが、ユダヤ票を獲得して当選するために史上初のユダヤ人国務長官を更迭しようというのです。変なこともあるな、どんな背景があるのだろうかと不思議でした。

私は寮の部屋に戻って、そのことについて書き始めました。誰に頼まれたわけでもなく、ただ書いたのです。アンの家族はアメリカのデモインレジスター紙の論説委員を知っていたので、アンは春休みに帰郷する時に私の書いたものを持っていきました。すると、編集者が気に入ってくれて、五十ドルでその原稿を買ってくれたのです。こんなにクールなことはないと思いました。町を歩いていて、何か思いついてそれについて書いたら五十ドルもらえたのですから。それから書くことに夢中になりました。それ以来、ずっ

と書き続けています。

ですから皆さんが、世界旅行をするとか、大学院に行くとか、就職するとか、しばらくのんびりしようとか、卒業してから何をしても良いのですが、何かをする際には、頭で考えるだけではなく、自分の気持ちに正直になることです。正直でいれば進む道がわかってきますから。本当に好きなことをするのです。今それが分からなくても、探し続けることです。本当に好きなことを仕事に出来たら、良い仕事ができます。コンピュータでもアウトソーシングでもできないことが出来るのです。誰より優れた放射線技師やエンジニアや教師になれるのです。

この第一のレッスンをスラム街に住む詩人テイラー・マリの詩で締めくくりたいと思います。教師をしている妻に、彼女の友人が贈ってくれた詩です。タイトルは「教師にできること」。卒業式のスピーチにふさわしいと思うのでご紹介します。

ディナーの席で客同士が人生について話していた。ある会社の重役が、今の教育をけなし始めた。

「人生いろいろな選択肢があったのに、よりにもよって教職を選んだような奴から、生徒が学ぶことなんて何もない。出来るやつは社会で働き、できないやつが学校で教える。本当にその通りだ。」

彼は、同意を得ようと問いかけた。

「スーザン、君は教師だよね。正直なところ、君には何ができるんだ?」

スーザンは思ったことをずばりと口に出すタイプだったのでこう答えた。

「私に何ができるかって？　そうね、子供が信じられないほど一所懸命勉強するようになるわ。教室で四十分間まったく静かに座らせておくことが出来るわ。成績が悪くても頑張った子には、満足感を持たせることが出来るし、たとえ成績が良くても頑張らなかったら、悔しい思いをさせられるわ。

私が電話すると親はびくつくし、子供が頑張っていると話すと親はとても喜ぶわ。私にできるのは、不思議さに気づかせること、疑問を抱かせること、いろんな見方をさせること、心から謝らせること。たくさん書かせて、たくさん読ませること。数学の勉強をしっかりさせること。自分の本当の気持ちを作文に書かせること。頭が良くても、頭でっかちは駄目で、収入で人を決め付ける人は相手にしないと、子供たちに分らせること。」

スーザンは一呼吸おいて尋ねた。

「私に何ができるかわかったかしら？　ところで、あなたこそ何ができるの？」

レッスン二

レッスン二は、人の話をしっかり聞くことが人生において大切だということ。CBSニュースの同僚、ボブ・シュナイファーはこういっています。「特ダネって、人の話を聞くべき時に自分がしゃべってしまって逃げていくんだよ。」人の話をしっかり聞くというのは、人間関係でも政治でも大切なことですが、あまりその重要性が知られていないと思います。ユダヤ系アメリカ人の私が、二十年間もアラブイスラム世界の取材をしてこられた秘訣はと聞かれると、いつもこう答えます。

人の話をちゃんと聞くこと。そうすると上手くいくものなのです。相手とは考えが違っても、その人の話をきちんと聞くことです。そういった相手との会話はこういう風に始まることがあります。

同時多発テロの後にサウジアラビアに行きました。サウジ政権について批判的な記事を書いていたので、サウジの人々が私に対してどう思っているかを知って、いつもびっくりしました。彼らとのやり取りはこんな風に始まるんです。

「こんにちはトム・フリードマンです。」
「ええ？　あのニューヨークタイムズの？」
「そうですよ。」
「えっ、なんでここに？」
「はい、取材です。」
「よくビザが取れたね。」
「ええ、不法滞在じゃないですよ。」
「君の書いたものはとんでもないよ。君と話をしたいから、家に食事に来ないか？友達を呼ぶからさ。」

ジャーナリストとして、取材先の人に心を開いてもらいたかったら、自分の言い分を聞いてもらわなければならない。そうするためには自分の耳を開いて彼らの言い分を聞くことです。聞くことで敬意を示すこと。しっかり聞いてあげたら、自分の意見を率直

に言っても聞いてもらえる。それに、人の話からは驚く様なことを学べます。

レッスン三

レッスン三は一番大切な能力についてです。どんな分野でも同じですが、学び方を知るということです。ジャーナリストになってよかったと思えることは、大学院でしか学べないような高度な知識を学べたことです。これまで着任したベイルートでも、エルサレムでも、国務省でも、ホワイトハウスでも、財務省でも、修士号が得られるぐらい勉強しました。

みなさんそれぞれ大学で専門の勉強をしたのでしょうが、さらに学び方を知っているほうが役に立つと思います。世界はどんどんフラット化してきて、どんな分野の仕事も変化が早いので、学び方を知っているほうが役に立ちます。貴重な存在になれるのです。それに気づいたのは、一年半前にインドのバンガロアでアウトソーシングについての取材をした時です。

十日間に六十時間の撮影を行ったのですが、私はその間にどんどん体調がおかしくなっていきました。というのも、バンガロアにアメリカ人の税金を処理している人や、新しいソフトウェアを開発している人や、病院で撮影した私たちのレントゲン画像を解析している人や、紛失した預入荷物を追跡したりする人がいて、いったいどうして離れた場所でそんなことが出来るのかわかりませんでした。アウトソーシングの世界を理解するには自分の知識は時代遅れだと思いました。帰国すると会社に休暇願を出しました。そして、『フラット化する世界』を書いたのです。自分自身が時代に乗り遅れないように

勉強したのです。私たちみんながそうしなければいけない時代なのです。

『フラット化する世界』を出版してその宣伝で数ヶ月間、各地を回っているときに何人かの人にこう聞かれました。「娘は中国語を勉強しているから、将来役立つわよね？」まるでそれが安定した就職につながるように思われているのです。でもそうではありません。中国語を学ぶのはすばらしい。でも世界がフラット化しているときに大切なのは、勉強の仕方を知っていることです。それを知っていればどんな仕事もできて、専門家にもなれるのです。ある時中学生にこう聞かれました。「勉強の仕方はどうすればわかるんですか？」

ああそれは良い質問だね、と私はいいました。一番いい方法は良い先生のクラスをとることだよ。ギリシャ神話でも物理でもいい。大切なことは楽しく勉強できること。いい先生に習うと、何を学ぼうと、勉強すること自体が楽しいと思えるんだ。

レッスン四

レッスン四です。次に言いたいのは、ツールに振り回されないでほしい、ということです。ベイルートで記者生活を始めたときは、アドラー社の手動タイプライターを使っていました。その古いタイプライターで書いたニューヨークタイムズの記事は今でも気に入っています。大切なのはツールではないのです。今やラップトップや携帯電話、インターネットやグーグル、ｍｐ3やｉＰＯＤの時代ですが、このことだけは覚えておいてください。こういった電子機器を使うと仕事の効率は上がりますが、中身までよくなるわけではないのです。コミュニケーションのツールではありますが、だからとって、

フェンス越しにお隣さんに何を話しかけるとか、困っている友達をどう慰めてあげるとか、目を引く見出しを書けるとか、科学で画期的な発見をするとか、文学で斬新な文体を生み出すとかはできないのです。

貴重な存在になるには、熱い心や、想像力、やる気や、新しいものを生み出す力が必要ですが、それは最新機器ではダウンロードできません。自分で考えて、読んで、書いて、面倒な計算もして、旅に出て、勉強して、思いを巡らせて、美術館にも行って、人と会って、そう、昔ながらのやり方で積み上げていかなければならないのです。

私はＩＴの影響については人一倍興味がありますが、ＩＴ機器には疎いのです。携帯電話を買ったのも誰よりも後でした。しかも、自分からかける時にしか電源は入れませんし、留守電を聞く方法も判りませんし、知りたいとも思いません。娘にはいつも文句を言われてますが、しょっちゅう電話がかかってきたら集中できないからです。新聞の私のコラムにはメールアドレスは載せていません。ですから、言いたいことがある人は新聞社に電話をかけてアドレスを聞き出すか、手紙を書くしかないのです。

一年前に本を書く際に初めてマイクロソフト社のワードを使い始めました。一九八〇年代から使っていたソフトがいよいよ時代遅れになってしまったのです。ぎりぎりまで使える物は使って、どうしようもなくなってから新しいものを使うようにしています。ツールはシンプルなほうがいい。ツールにこだわるよりも、ひとの話を聞いたり、書いたり、問題を考えたりすることに時間を割きたいからです。私の切なる願いは、ツールのマニュアルにこういった警告を載せて欲しいということです。『このツールで作った内容の品質保証をするものではありません。』

レッスン五

レッスン五は、批評する際には二つの姿勢があるということです。建設的な批評と、否定的な批評です。ジャーナリストや政治家にもその区別をつけられない人がいます。私は駆出しのころに同僚からその違いについて学ぶことが出来ました。

一九八二年の事ですが、ニューヨークタイムズの経済部に若い編集者がいました。ナザニエル・ナッシュという心優しい熱心なクリスチャンの彼とイスラエルや聖地のことについてよく話していました。その年の四月に私は特派員として激しい内戦が続くレバノンに派遣されることになりました。送別会でナザニエルに言われたことがずっと心に残っています。

「君の命を守ってくれるように、僕の神様にも言っておくよ」

宗派を超えた気持ちが伝わりました。危険地帯のベイルートから三年後に戻り、彼に無事を報告した時は彼もよろこんでくれました。彼はそんな優しい気持ちの人でした。いつか彼に恩返しができたらと思っていました。

何年かたってナザニエルは編集者から記者に転進して、最初はアルゼンチンで、後にタイム誌のドイツ支局でヨーロッパの経済記事を担当するようになりました。ナザニエルは、私が知る中で、一番幅広いものの見方ができる記者でした。様々な立場に立てるがゆえに、記者としては、人がよすぎて、ジャーナリズムの世界ではやっていけないといわれていました。しかし、そんな批判はものともせず、次々と良い記事を書いていきました。彼は、まず物事の背景について広い視野から考え、新しい事実や考え方を受け

入れるといった建設的な批評の姿勢を持っていたのです。

その反対は自分の思い込みに基づいて物事を批評していくという批判的な姿勢です。なんだかおかしいから調べてみよう、という姿勢と、絶対におかしいから、問い詰めてみようという姿勢です。ナザニエルは、いつも前者でした。

残念な事に、一九九六年ナザニエルは四十四歳の時にクロアチアで飛行機事故で亡くなってしまいました。ロン・ブラウン商務長官の飛行機に同乗して取材をした時のことです。

皆さんに知っておいてほしいのは　本物のジャーナリストというのはナザニエルのような記者のことです。ケーブルテレビでまくしたてているリポーターではありません。記事になるかならないかを問わず、クロアチアのような危険地帯に、身の危険を顧みず軍用機で乗り込む、そんな記者魂を持っていました。ナザニエルが私の無事を祈ってくれたように、私も彼の無事を祈っていましたが、祈りは届きませんでした。人柄の良い彼は、今頃神のもとで、記事を書いていることだろうと思います。

世の中には最初から物事を否定的にとらえる人たちも多くいます。しかし、求められているのは物事を受けいれ、建設的に批評できる人です。皆さんも自分とは異なるものを受け入れる幅広い心を持った批評家になってください。

レッスン六

ナザニエルの若すぎる死で私は大事なことを思いだしました。それを皆さんにお話しします。すぐにできることです。「お母さんに電話をすること」。

同時多発テロが起きた時に、ハイジャックされた飛行機や燃えさかる建物から、愛する人に最後のさよならを言うために人々が電話をかけたということはご存知ですよね。でも、電話もできずに亡くなってしまった人も沢山いました。皆さんがまだ小学生ぐらいの頃、アラバマ大学のアメフト部にベア・ブライアントという伝説的なコーチがいました。彼が大御所となった頃、ベルサウス電話会社からテレビCMへの出演依頼がありました。BGMにのせて、ブライアントコーチはがっしりした声でこうセリフを言うことになりました。

「今日はお母さんに電話したかい？」

撮影の当日、ブライアントコーチがカメラに向かった時に、言ったセリフはこうでした。

「今日は　お母さんに電話したかい？　僕も母さんの声が聞きたいよ」

ブライアントコーチの母はもうこの世にいなかったのです。そのままコマーシャルは流れ、大反響を呼びました。

私の父は私が十九歳の時に亡くなったので、私が好きな仕事についたのをついに見ることはありませんでした。父に電話できたらと心から思います。八十六歳の母は痴ほう症なので、私が週に二回コラムを書いていることはわかりますが、何曜日に掲載される

かは覚えられません。毎日新聞をめくっては私のコラムを探し、コピーして施設の仲間に見せています。私にとって母の気持ち以上にうれしいものはありません。

親というものはみなさんが思っている以上に、みなさんのことを大切に思っています。今日の話の中で、すぐに実行してほしいのはお母さんに電話する事、そしてお父さんにも。喜んでもらえますよ。

卒業生の皆さん、これでお話ししたいことは終わりです。私が言いたかったことは一言でいうと「幸せは旅そのものであり、目的地に着くことではない」ということです。喜びや情熱や前向きな心で仕事をする人は成功するものですが、成功したいからといって、心にもない気持ちは持たなくていいのです。

三十年前、私はみなさんがいる場所に座っていました。卒業以来ジャーナリストとして、やってこられたのは私が仕事のプロセスを楽しんできたからです。見習い記者としてUPI通信で夜番をしたり、ベーカー国務長官に随行して取材をしたりすることも楽しかったですし、現在も、取材をしたり、コラムの執筆をしたりすることを楽しんでいます。時には嫌になって、投げ出したいこともありました。でも何をするにおいても、そこから学ぶことが喜びでした。目的地にたどり着くことだけが人生ではなく、その行程も楽しむことが大事です。最後にマーク・トゥエインのウィットにとんだ名言を聞いてください。

お金はいらないと思って働けよ

報われなくても人を愛するんだ
踊るときは人目を気にするな。
そしていつも、人生って素晴らしいと思って生きろ。